



日サ協発第25060006号
2025年6月26日

関係各位

公益財団法人日本サッカー協会

国際サッカー評議会(以下、IFAB)から2025年6月2日付回状第31号をもって、競技規則第10条「試合結果の決定」、及び第14条「ペナルティーキック」における「ダブルタッチに関する明確化」が通達されました。

通達自体の日本語訳は、下記のとおりです。サッカー競技にかかわる関係者、特に競技者、監督/コーチそして審判員の皆さまには、これまでどおり、この通達を十分に理解した上で、プレー、指導、そしてレフェリングに携わっていただきたく、お願い申し上げます。

記

競技規則第10条「試合結果の決定」、及び第14条「ペナルティーキック」における 「ダブルタッチに関する明確化」について

親愛なる皆さま、

IFAB は、**第 10 条-試合結果の決定**と**第 14 条-ペナルティーキック**において、キッカーが偶発的に両足で同時にボールを蹴った場合、またはキックした直後にボールがキッカーの蹴っていない方の足または脚に触れた場合の状況に関して、明確化することを望んでいる。

このような状況はまれであり、第 14 条で直接取り上げられていないため、主審は当然のことながら、ボールが他の競技者に触れる前にそのボールに再び触れたことでキッカーを罰し、相手チームに間接フリーキックを与えたり、PK 戦(ペナルティーシュートアウト)の場合はキックを失敗と記録してきた。

ただし、第14条のこの部分は主に、ボールが他の競技者に触れる前に、キッカーが意図的に続けて2度触れる状況(例: ボールがゴールキーパーに触れることなく、ゴールポストまたはクロスバーから跳ね返った場合)を対象としている。これは、通常、キッカーがキックを行うときに滑ることで、偶発的に両足で同時にボールを蹴ったり、キックした直後に蹴っていない方の足でボールに触れたりすることとは大きく異なる。

とはいえ、ボールの軌道が変化することでゴールキーパーが不利になる可能性があることを考えると、偶発的であってもダブルタッチしたことを罰しないことはアンフェアである。

したがって、IFABは以下の状況における進め方を明確にしたい。

- ペナルティーキックのキッカーが偶発的に両足で同時にボールを蹴った場合、またはキックした直後にボールが蹴っていない方の足または脚に触れた場合：
 - キックが成功した場合、キックを再び行う。
 - キックが失敗した場合、間接フリーキックが与えられる(ただし、守備側チームが明らかに利益を受ける状況で主審がアドバンテージを適用した場合を除く)、またはPK戦(ペナルティーシュートアウト)の場合、キックは失敗と記録される。
- ペナルティーキックのキッカーが意図的に両足で同時にボールを蹴った場合、またはボールが他の競技者に触れる前に意図的に続けて2度触れた場合：
 - 間接フリーキックが与えられる(ただし、守備側チームが明らかに利益を受ける状況で主審がアドバンテージを適用した場合を除く)、またはPK戦(ペナルティーシュートアウト)の場合、キックは失敗として記録される。

これら明確化された進め方は、2025年7月1日以降に開始される競技会において有効になる。または、それ以前に開始される大会で適用することもできる。

ご確認いただき感謝します。何か疑義や質問があれば、お問い合わせいただきたい。

敬具

IFAB 事務局長

ルーカス ブラッド

この場合の**ダブルタッチ**とは、キッカーがシュートを打つ際に、ボールを蹴った直後に軸足に当たる場合、または、先に軸足でボールに触れた後にシュートを打つ場合を指します。

ダブルタッチをした場合の対応比較表

□試合中のペナルティーキック

	これまで	改正後
ゴール	守備側の間接フリーキック	キックのやり直し
ノーゴール	守備側の間接フリーキック	守備側の間接フリーキック

□PK 戦(ペナルティーシュートアウト)

	これまで	改正後
キックが成功	キックの失敗	キックのやり直し
キックが失敗	キックの失敗	キックの失敗

以上